PS-012-4

VATS肺葉切除後に発症した肺静脈血栓塞栓症の1例

沖縄赤十字病院内科。国立沖縄病院

宮城 洋1, 屋良 賢1, 石川 清1

【はじめに】肺静脈血栓塞栓症（以下，肺静脈血栓塞栓症と略す）の発症頻度は0.1%と低いが，発症すると死亡率は10～30%と厳しい状態になる。今回，我々はVATS肺葉切除術後に突然の心不全を来たした1例を経験した。

【症例】男性35歳。既往歴に肺結核があるが，高血圧にて当院通院し，胸部レントゲンにて異常，左肺尖部に腫瘤を見つけたが，気管支鏡下生検にて肺瘻と診断され，遠隔転移は見られなかったため手術を施行した。最終的に肺静脈下にて切開を行い，既往歴のため開胸術を施行した。左上葉切除およびリンパ節群の摘出を行った。肺葉のびらん実在したのみで，合併切開を行った。

【術後の病期時】術後IIAと診断された。術後11日目に術者が見られが保険診療にて3日目に死亡した。術後14日より軽症を経験した。

【結論】肺静脈血栓塞栓症を発症し救命を得なかった例を経験した。

【参考文献】
1. 宮城 洋1, 屋良 賢1, 石川 清1. ヴァイス手術における術後グリセリン洗浄の必要性の検討. 第24回日本呼吸器外科学会総会号 183 (377)

PS-012-5

呼吸器外科手術における術前グルコース洗浄の必要性の検討

自治医科大学呼吸器外科

大谷 真1, 長谷川 隆1, 手塚 慎1, 山本 真1, 金井 義彦1, 手塚 康裕1, 連佐 聡2, 佐藤 亮夫1, 連佐 隆樹1, 梅原 坂智1

【背景】呼吸器領域を含む外科手術の術前処置としてグルコース洗浄を行うことが一般的であるが，肺動脈圧などの副作用も報告されている。

【目的】呼吸器外科手術の術前グルコース洗浄の必要性について検討した。

【方法】2016年5月以前に施行された呼吸器外科手術患者に対して術前にグルコース洗浄を投与していたが，6月以降はグルコース洗浄投与を行わずなかった。

【結果】術中排便を起こした症例は両群ともなく，術後消化器合併症について有意差を認めなかった。

【結論】呼吸器外科手術の術前グルコース洗浄投与は不要であると考える。

PS-012-6

呼吸器外科創傷術における体重測定の有用性

名古屋大学医学部附属病院呼吸器外科

伊藤 志義1, 宇佐美 賢1, 関根 光1, 佐藤 尚1, 川口 明1, 谷口 哲郎1, 横井 香平1

【はじめに】呼吸器外科創傷術において，循環動態の把握に我々は体重測定が簡便で有用な方法と考えている。創傷術の体重変化が患者誘因や術式によってどの程度の影響を受け，合併症予防につながるかを検討した。

【方法】対象は2005年1月から2004年4月までのカルテルパス通院手術症例で試験期間を除いた。

【結果】対象症例211例中，体重変化を測定できたのは186例であった。

【考察】体重変化の程度は，術後体重変化率（術後体重変化率）と体重変化の体積を術前体重で除した値である。

【結論】体重変化率は0.054%であり，体重変化の体積は術前体重変化率2.4%であった。

【参考文献】
1. 伊藤 志義1, 宇佐美 賢1, 関根 光1, 佐藤 尚1, 川口 明1, 谷口 哲郎1, 横井 香平1. 呼吸器外科創傷術における体重測定の有用性. 第24回日本呼吸器外科学会総会号 183 (377)

PS-013-1

原発性肺がん外気道における標準的アプローチの比較−前方肺動脈閉塞術は術中出血量を減らす

佐賀大学医学部呼吸器外科

桜木 裕1, 川原 裕正1, 島村 英1, 田中 秀夫1, 正田 正浩1

【目的】標準割開手術（前方肺動脈閉塞術：AA，後方肺動脈：PL，肝動脈正中閉塞：MS）において前方肺動脈閉塞術の優位性に関し術期の術式および術期の術式を検討した。

【方法】3項関胸術にて気管前リンパ節群摘出が可能である右肺がんが対象。

【結果】1998年10月～2005年12月の右葉II期切除＋右鎖骨間広範切除112例（AA群27例，PL群48例，MS群37例）に関し患者背景（年齢，性別，体表面積，基礎疾患，術前ステージ等），術中出血量（切開部，分離の状態，確率の程度，手術時間，術中出血量）術後合併症（肺偽，肺結核，術中予防，術中予防，その他15項目）。

【考察】術中出血量および長期生存を3群間で比較検討。結論】術中出血量を含むすべての項目において前方肺動脈閉塞術群が有意に低値を示した。

【結論】前方肺動脈閉塞術が術中出血をより低値に抑えられ術中出血量を減らすことが示唆された。しかし，これを証明するためには今後は比較検証やサイトラインなどの生物学的パラメータの比較検討を要すると思われる。

NII-Electronic Library Service